

# 繊維工場における家庭寮の形成と建築構成

山 田 智 子

繊維工場の家庭寮的な建物で早い時期に建設されたのは、大正4年開始の帝國製麻大阪工場の自修舎である。昭和初期には東洋紡績姫路工場にもこの形式の建物が採用された。その後は戦時体制に入る中で青年学校の教育の中に組み込まれた。繊維工場の家庭寮は、法律や社会情勢に影響を受けながら、学校教育と同様に展開したが、民芸運動と連動した家庭寮や本格的な書院造の家庭寮など建築構成にバリエーションがみられた。

キーワード：家庭寮、繊維工場、近代、女子教育、寄宿舎

## 1. はじめに

「家庭寮」の記録が最初にみられるのは大正2（1913）年奈良女子師範学校教授の藤堂忠次郎による「山口福岡大分三県学時視察私報」とされる<sup>1</sup>。その中で、福岡県直方高等女学校の「家庭寮」が「通学生徒ヲ一定期間此ニ收容シテ家庭のニ實際ニ訓育シヤウトイウ」目的で建設されつつあることが報告され、賞賛されている（実際家庭寮は大正3年に竣工している）<sup>2</sup>。

「家庭寮」成立以前の明治期には、巖本善治による別舎主義的寄宿舎がキリスト教主義の女学校で採用されていた<sup>3</sup>。明治後期になると、政府は国家主義を鮮明にした女子教育振興策を打ち出す。良妻賢母としての女徳の涵養が重視され、教科外活動や生活指導等、寄宿舎での教育が教室の教授と同程度に重要なものとなり、女学校寄宿舎へ擬制家族制度が導入される<sup>4</sup>。

以上のような前史があり、学校教育の場では、寄宿舎教育から家政教育的機能を分離独立して家庭寮教育が成立した。そして戦時体制に入っ

ていく過程で、女子実業学校や社会教育的女子教育機関を中心に宿泊施設を中核とする家政教育が広く普及していった<sup>5</sup>。これには昭和5（1930）年に設立された官制の婦人団体である大日本連合婦人会による家庭寮事業の成功も影響している<sup>6</sup>。

戦後は、家庭寮と類似した、米国式の家政実習館Home Management Practice Houseが昭和25（1950）年に奈良女子大学に導入され、その後、教育系大学、短大、地域などに伝播した<sup>7</sup>。

以上のように、家庭寮とそこで行われる教育に関する研究は、女子師範学校や高等女学校で行われる家庭科教育や官制の婦人団体の事業を対象としてきた。したがって若年女子従業員が多い繊維工場で、社会教育の一環として組み込まれてきた家庭寮の実態については、ほとんど知られていない。

そこで本稿では、近代の紡績や製糸等の繊維工場の構内に建設された家庭寮について、その形成と建築構成の一端を明らかにすることを目的とする。なお、本稿で扱う家庭寮は、結婚を間近に控えた女性たちを少人数で住まわせ、起

居を通して家事教育を行う住宅と定義する。

## 2. 近代の繊維工場における家庭寮前史

繊維工場では、明治後期に、キリスト教的博愛主義の経営者によって、ユニークな寄宿舎が建設されていた。中でも倉敷紡績株式會社の「分散式寄宿舎」は多くの文献に取り上げられ、紹介されている<sup>8</sup>。

倉敷紡績株式會社倉敷工場では、明治39（1906）年、大部屋方式の寄宿舎内にチフスが蔓延した。当時新社長に就任した大原孫三郎により、寄宿舎が改善され、明治41年から45年にかけて、1棟あたり4室で構成され小人数単位で生活する「家族的分散式寄宿舎」が建設された<sup>9</sup>。その後、第一次世界大戦後に増産を目的に、女子従業員を多数必要としたことから、倉敷工場を範として、大正8（1919）年、万寿工場に本格的な「分散式寄宿舎」が多数建設された。

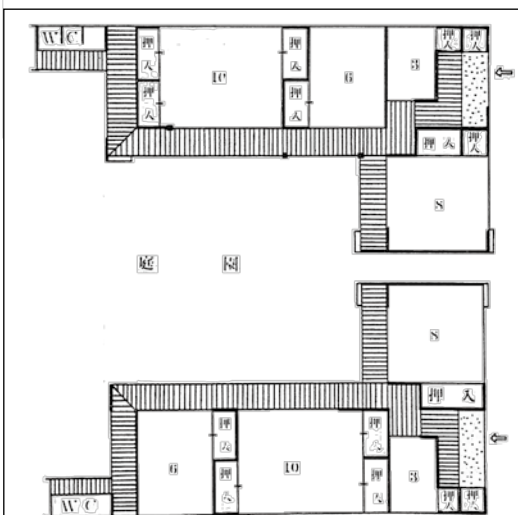


図1 倉敷紡績株式會社分散式寄宿舎平面図（大正8年）

出典：『倉敷紡績百年史』、倉敷紡績株式會社、pp.143、1988

各棟は木造平屋建て切妻屋根瓦葺で、10畳、8畳、6畳、3畳、玄関で構成され、洗面所・便所が付く（図1）。4棟が庭園を囲んで1区画を形成していた。平行配置だった倉敷工場よりも共有空間の利用にあたってプライバシーが考慮されている<sup>10</sup>。

以上のように、家庭寮成立以前の繊維工場では、別舎主義的寄宿舎が設置された事例もあった。明治前期の女学校寄宿舎と同様に、キリスト教教育にその根幹があった。

## 3. 近代の繊維工場における家庭寮

近代の繊維工場には「家庭寮」はいつ頃導入されたのだろうか。これについては多くの会社の社史をあたってみたが、ほとんど記載がない。数少ない資料の中から、「家庭寮」とほぼ同様の趣旨で造られた「家事練習所」や「主婦養成所」が確認できた。以下に2工場の事例を紹介する。

### 3-1. 帝國製麻大阪工場における家事練習所「自修舎」

現在までに入手できた繊維工場に関する資料のうち、戸建ての住宅で宿泊を伴って実地された家事教育について、最も早い時期に記述があるのは帝國製麻株式會社大阪工場である。この工場の「自修舎」については、大正5（1916）年3月、工業教育会を主催していた宇野利右衛門により、一般に紹介されている<sup>11</sup>。その記述から「自修舎」は大正4（1915）年10月に開始されたことが判明する<sup>12</sup>。高等女学校に「家庭寮」が設置されたのは大正3年であり、その時点から約1年遅れるが、時期的には大差がない。この「自修舎」は、「模範の家事練習所」と絶賛されている。

「自修舎」は、「寄宿舎に在住しつつ、ある女工の内で、契約期限を勤め上げて、最早や郷里に

歸つて縁付きを為すべき年頃の娘を、幾人かづゝ交代で、一定の期間収容して、御飯炊き副食物の拵江方、掃除の仕方夜具家具等の扱方、其他一切の家事を一通練習せしめて、嫁入つてから後ちも差閤なく、一人前の妻女としてやつて行ける様に、修養せしめる」目的で設置された。その背景には、工場の寄宿舎の生活では、ご飯は「三度々々温いのを据膳で食べさせ」、掃除も自分たちの部屋以外は専門の掃除人にまかせ、風呂も沸いており、毎日工場へ勤めに出ていさえすれば「まるでお嬢さん暮らし」であり、この生活を2年間続けていると、「家事的の能力を失ふて、所謂、縦の物を横にもしないどうらくものに成り果てる」という考えがあった。

建物は、同工場構内の「普通寮舎より少し離れた庭園の中」にあり、不用になった病院の一部を移して改築されたものである<sup>13</sup>。その規模と間取りは、「八畳二間に四畳半の臺所が付き、二坪程の炊事場があり、便所其他完全に揃ふて居る、先づ普通中人数の一大家族が住む位の家」である。また、「座敷二間には、押入れ、床等も附いて居て、玄関から勝手まで通つて居る、廊下の両側にあるので、これが此自修室に居る女工達ちの居間に當てられて居る。臺所は即ち食堂で、此所には一間の押入があつて、米櫃、食料品の貯藏等に當てられて居る。炊事場には、水道、流し、竈、食器納入場、薪炭入れ、等恰も奇麗好きの妻君が監理しつゝある、勝手元の如く、整然と設備されて」いた。

使用方法は、契約期限を勤め終えた女工の中から20名が選ばれて「自修舎」に2ヶ月間住み、食事、掃除等全くの自治により、「一種の家庭生活」を模擬的に行うというものであった。2ヶ月が経過すれば、この20名は普通寮舎へ復帰し、毎月半数ずつ入れ替わる。室長は模範女工

として選奨された者が6ヶ月を1期として務める。この上に監督者として裁縫教師があたり、家事、炊事一切を教授する。食料品の受渡しは工場の賄所から受け、炊事当番のものが自由に献立を考え、準備するというものであった。

### 3-2. 東洋紡績株式會社姫路工場の主婦養成所「自修寮」

帝國製麻の次に、「主婦養成所」として記述があるのは東洋紡績株式會社姫路工場である。同社は三重紡績と大阪紡績の合併によって成立した当時世界有数の大企業である。同社姫路工場では、結婚退職後に主婦になった時の準備として、家庭を想定した戸建ての住宅に宿泊して家事教育が行われていた。この工場も、昭和2(1927)年、宇野利右衛門により、模範工場として紹介されている<sup>14</sup>。以下はその概略である。

同社の姫路工場の従業員は、「修養團」<sup>15</sup>を中心として団結している。「修養團」の思想に傾注しながら、工場構内には稻荷神社があり、希望すれば各部屋に神壇を設けて天照大神やその他の神々を祀ることもできる。また社宅の構内には地藏堂があり、寄宿舎の大広間には仏壇を置いて礼拝がおこなえる。女子寄宿舎には仏教婦人会があり、毎夜勤行を行い、毎週1回は僧侶を招聘し、説教をきくことになっている。同工場では敬神崇佛の思想を養成しつつあると宇野は指摘する。

同社の従業員に対する教育方針は、「業務の餘假を利用して、彼等の將來の爲めに適當にして有効なる教育を施行し、善良なる個人を作ると共に、一面に於ては國家社會の一員として、協同生活の自治に順應すべき基本の養成に努める」ことである。そのために、「各個人の、人格を尊重し、個性に基づきて、知育、徳育、体育、美育の涵養を爲し、思想の善導に力め、男らしき男、女らしき女を作ること、最も力を注ぎ

つゝあるので」あった。これには当時の政府の国粋主義的な教育思想も反映されていた。

同社は「訓育」<sup>16</sup>を「団体訓育」と「個人訓育」に区別している。「団体訓育」は在郷軍人会や青年団などの外部組織と連携して行う教育で、居住施設の部署ごとに組織全体で行う。「個人訓育」は、寄宿舎の新入者養成係が行う養成訓育、同社が統括する東洋女学校及び同校の寄宿舎内で行う訓育がある。女学校本科の他に、裁縫ミシン手芸科、作法科、割烹科、生花抹茶、音学科があり、一般の女子従業員や社宅住まいの婦人にも教授を行う。それらの学科と並行して「主婦の養成」を行うのが自修寮である。自修寮では、「女子寄宿舎構内に純家庭式建物一棟六戸を有し、入社後相当年月を経たるもの及び婚約成りたるものを二ヶ月間収容して、掃除、炊事、作法、洗濯、洗張、交際、家事、経済、等主婦として必要なる知識を實踐」している。一戸に8名、計48名を収容し、教師（世話係）1名、室長6名が指導にあたる<sup>17</sup>。入寮資格は、上記の条件に加えて、「平素の勤務振り、品行を詮衡して、高點者を採用」する。志望者は多く、「常に満員の盛況」であったという。写真1は、主婦養成所（自修寮）の一部で前面は客間、奥は世話係室である<sup>18</sup>。

また宇野は「五 東洋紡績姫路工場の特殊待遇施設」の中で、特に同社の「母たる母性を優遇する施設」を第一に紹介し、「幼児保育の設備」を挙げている。その他、「女学校生徒の保護」「ミルクホール」「内職の奨励」「経営の目標」「一善報徳の申合せ」「個性調査票」「履物の修理利用」「寄宿舎庭園の花壇」「養成教育」「工業補修学校」「運動の奨励」「主婦の養成」「室長の養成」「講習會」を紹介している。

この「主婦の養成」の稿に、その目的が記載されている。「寄宿舎に在住する女工は、大抵

所謂、嫁入り前の娘達ちであつて、二年なり三年勤めた後は、郷里に歸つて婚嫁する人達ちであるから、此の工場在勤中に於て、相當に、家事の修養を仕て置く必要があるのである。然るに、工場に於ては、家事の第一義である食事の調理が、大規模の集合法に依つて行はれ、女工達ちは毎日、据膳で食事をするのであるから、工場生活を三四年もやつた娘さんは、御飯の炊き方も知らぬと云つた様なことになり、將來一家の主婦として、家事を賄つて行く上に、大いなる欠點がある」とその背景を唱え、同工場ではこの欠陥を補う目的で自修寮が設置されたとする。



写真1 東洋紡績株式會社姫路工場「主婦養成所（自修寮）」

出典：『汗愛の靈火に輝く模範工場東洋紡績姫路工場』、宇野利右衛門、工業教育會出版部、口絵pp.16、1927

以上、2工場の事例をあげたが、国粋主義的な思想が高まる中、良妻賢母を養成する施設が企業内に設置されたのは自然な流れであったといえよう。しかし、2工場とも「家庭寮」という言葉は用いられていない。女学校の教育機関とは区別された工場内の教育には、学校教育の影響はほとんどなかったとみられる。以降、戦時体制に入るまで「家庭寮」という言葉は繊維工場には見られない。「家庭寮」という名称が

社会教育事業として広く一般に普及するのは、もう少し待たねばならなかった。

#### 4. 大日本連合婦人会による家庭寮事業

大日本連合婦人会は、昭和5（1930）年12月23日に家庭教育振興と家庭生活改善を目的に設立された官制の婦人団体である。その創立は、同日に出された文部大臣訓令「家庭教育振興ノ件」に基づいている。その事業や年度ごとの動向は『沿革史』<sup>19</sup>に詳しい。主な事業は、機関誌『家庭』の発行、家庭教育相談所の設置、各種展覧会や講習会等の開催、社会教育機関としてのお茶の水家庭寮の開設・運営である。お茶の水家庭寮創設の背景には、従来の学校（高等女学校）教育に対する批判としての社会教育論があり、学校とともに家庭では行えない教育を実施することも創設の理由にあったことが指摘されている<sup>20</sup>。

お茶の水家庭寮は昭和7（1932）年4月20日に開校。「お茶ノ水家庭寮規則」によると、その目的は、「妙齡ノ女子ニ對シ家庭生活ニ必要ナル精神的修養ト實務の才能トヲ得シムル」ことであり、修養期間は6か月で毎回4月と10月に開始され、定員は30名であった。創立時の教科は、修養・作法・国語・家事・裁縫・科外（科学知識・一般衛生・趣味・体育・整容等）・見学実習・家庭実務であった。その後、大日本連合婦人会は、お茶の水家庭寮と同様の施設を福岡と大阪の2か所に設置した。

お茶の水家庭寮は創設すると同時に世間の人気を博し「花嫁学校」として広く知られるようになった<sup>21</sup>が、入寮生の多数は比較的裕福な家庭の出身者であった。そこで、裕福な階層以外を対象として全国に家庭寮事業を展開する目的で、町村家庭寮の普及に努めていく。この活動

により、「家庭寮」という名称が社会教育の場でもあった繊維工場に使用されるきっかけになったのではないだろうか。

#### 5. 『雑誌 民藝』が提案した家庭寮

昭和16（1941）年3月発行の『月刊 民藝』第24号は、「女子勞務者の生活様式の問題」として特集を組み、日本民藝協會が家庭寮を企画・立案し、提唱している。この試みは、日本民藝協會が「新たな民藝運動の歩みをさらに進捗させる第一案」であり、新境地を切り開いたものであった。民藝運動は、それまで見過ごされてきた生活器具類などに美的価値を認めようと、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司らによって大正末年頃から始められた運動である。当時倉敷絹織株式會社の社長であった大原聰一郎がこの民芸運動に協力していたことから、同社倉敷工場の女子労働者の生活を主題にとり、同協會が立案することになったものである。同誌に掲載された内容から、以下にその概要を示す。

##### 5-1. 家庭寮案の目的と基礎条件

家庭寮案の作成にあたり、日本民藝協會は数回にわたって同工場を現地調査している。その結果、家庭寮の基礎条件に次の6項目をあげている。

第一に、女子従業員の年齢が12歳から21歳で、大半が嫁入りするまでの一時的な短期労働者であることから、女子従業員の退社後の生活様式を主として教育する場であること。

第二に、調査対象の女子従業員597名のうち、507名が農家の出身であり、退社後は結婚あるいはその準備等のために農家へ帰っていくことから、女子従業員に対して行う教育方針は、農村生活に重点をおく。そのため家庭寮は農家の生活様式をとること。

第三に、同工場の女子寄宿舎在籍人員665名のうち、岡山県出身者の割合が64%と高いことから、家庭寮には岡山県の農家の建築様式を大体の基準として改案すること。

第四に、家庭寮を含めて福利施設その他は会社ができる限り完備するのが望ましいこと。これは、女子従業員の多くは農村の両親が健在であり、収入の半分位を両親に送金して経済的余裕がないため、生活用具類は自分で購入せず、会社が設備をする中で使用しているという調査結果に基づいたものである。

第五に、自分の農村のもつ生活文化の価値がわかるような設備と指導を施す場とすること。この背景に、日本の寄宿舎の建築様式が西洋風であり、さらには人員募集の手段としてガスコンロや電気コンロなどの新しい設備を置く工場もあるため、帰村した女子従業員が寄宿舎生活とのギャップに幻滅を感じたことがあった。

第六に、女子従業員の自由時間と指導を受ける時間とを分離せずに円滑に暮らし方の指導を与える場として、具体化する方法のひとつとなることである。これには、これまでの教育の弱点を解消するねらいがあった。昭和12年開始の同社青年学校女子部の家庭科科目は、裁縫・家事等生活的なもの、作法・生花等文化的なもの、衛生・育児等知識的なものがあるが、各々分離して教育を行っているため、暮らしとしての総合的な生活文化の融合、向上をはかる時間がこの科目には含まれていないと、同協会は指摘する。それに加えて、青年学校の時間は午後6時半から8時までで、勤務時間以外の大半が指導者のいない放任された時間である。家庭にいれば親から常に指導を受けるので放任された時間はない。ゆえに家庭寮は、女子従業員の放任された時間と指導を受ける時間を融合しようとする試みであった。

## 5-2. 家庭寮案の建築構成

家庭寮案は、「家庭寮設計圖」として、平面図(図2)、正面立面図(図3)、内部パース(土間、広間、食堂兼台所(図4)、主婦室、居間、客室)から成り、それぞれに説明がある。以下に概略を示す。

家庭寮の位置は、岡山県倉敷市外酒津にある同工場の女子寄宿舎の裏手で、約880坪余りの敷地を仮定している。この敷地の大部分は菜園、花壇、養鶏場、養豚場にあてられる。

規模は、「桁行九間半、奥行五間、臺所の下屋長さを二間半、奥行一間」とし、建坪は五十坪である。

外観は、前述した第三の条件に合うように、「大體岡山の農家を基準にとり、本目的にそふやうに改築した」ものである。木造平屋建てで、黒瓦の本瓦葺切妻屋根が載り、台所の上に煙出しを設ける。壁は腰が「なまこ壁」、上部は「真壁式で黄大津」と、当地方の民家風である。入口は「明障子」で、別に「大戸」を設ける。周囲に生垣を巡らせ、「岡山邊でよくみかけるような、手入れのいい植込」をする。ただし、北向きに建っているところは、一般的な農家の配置とは異なる。

内部は、表側(北側)に上手(西側)から洗面場、脱衣室・風呂、食堂兼台所、土間、客間が並び、裏側(南側)には寝室、主婦室(家庭寮常住者の部屋)、主室、寝室が配置されている。一見したところ伝統的な四間取り民家を改装したような間取りではある。しかし、本来の農家は平面の桁行半分が広い土間になっており、各部屋の用途は上手下手の部屋列により限定される。家庭寮案では、本来の農家と比較すると、各室の用途は寮生の宿泊や実習を想定して全く違った使い方がされている。また各室からは他室を経由することなく、目的の室にたどり着く



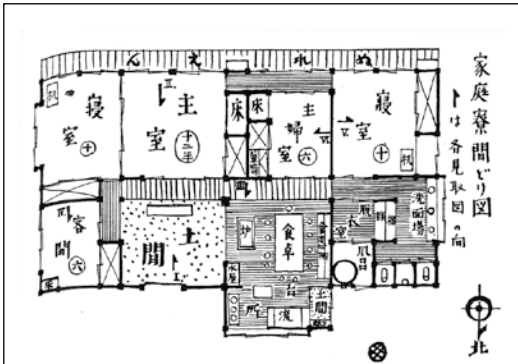


図2 家庭寮案 平面図  
(左端は綴じ部のため歪んでいる)

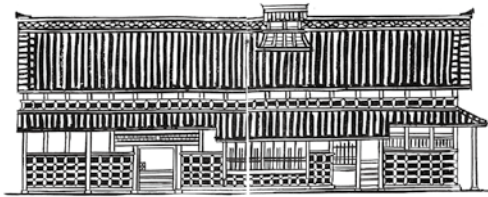


図3 家庭寮案 正面立面図(北側)



図4 家庭寮案 食堂兼台所  
(中央は綴じ部なので歪んでいる)

出典：『月刊 民藝』第24号、日本民藝協會、pp.12-18、1941.3

ことができる近代的な動線をもっている<sup>22</sup>。

### 5-3. 家庭寮案の使用方法

ここでは、工場内にある女子青年学校本科の

修了者(平均年齢19歳前後)10名を2組に分け、最初にそのうちの5名を住ませ、半月後に新たな5名を入れて、1か月単位で5名ずつを入れ替える。つまり、実習期間は1か月と設定している。指導者はこの家庭寮の主婦として永住する。毎日新旧の組から当番を1名ずつ出し、掃除、食事、その他の用意を、主婦の指導を受けながら行う。他の8名は通勤者のようにこの家庭寮から工場に出勤する。食材は工場の食堂から交付を受けるが、時々町の商店に買い出しに行く。

こういった方法は家庭寮ではすっかり定着していることがわかる。前述の2工場の事例にない新しい点は、納屋を造り、養豚場や養鶏場など農家の副業となるようなものを想定しており、田畑の手入れも実習できるようにすることであった。

全体としてこの家庭寮案は、「工場という擬似的都市空間における生活空間の設計において、民藝運動が提案したのは農村生活を理想化することを企図する」ものであったことが指摘されている<sup>23</sup>。実現されれば、審美眼をもった農家の主婦を養成するという点で、それまでになかった「家庭寮」事業の目的が達成されたのであろうが、物資統制の中でその実現は困難であったようだ。

## 6. 戦前から戦後における郡是製絲株式會社の家庭寮

郡是製絲株式會社は、創業以来、キリスト教教育を導入し、女子寮舎も教育の場であるとして、教育主任が寮長、教育係が副寮長、会社が任命した室長が寮長となり、起居を通して、躰教育や生活指導を行ってきた。同社の徹底した従業員教育は広く社会に知られている。ここで

は、戦前の家庭寮成立時の状況と、戦後の展開過程について建築構成を通して追ってみたい。

### 6-1. 戦前の家庭寮

同社工場に家庭寮が成立したのはいつ頃であろうか。同社では、固定資産調査を目的に全国29か所の工場について昭和7年3月に一斉に調査が行われた。その際に各工場の建物を1棟ずつ調べ、名称や規模等を記した記録が残っているが、それには家庭寮は全く記載されていない。

昭和15年11月20日発行の和知工場の沿革史『創業三十周年記念 郡是和知工場小史』には、和知工場の家庭寮の内部の写真2枚が掲載されている（写真2）。1枚は工女が竈で煮炊きをしている写真で、もう1枚は床の間に掛け軸や生け花が飾られた座敷の写真である。その下には「陽光の下農園に耕すも裁縫のため休日割くも家庭寮に入りてこもごも起居するも皆やがて入る家庭生活への準備―」（実際の縦書きの文にある濁音の繰り返し記号「く」は筆者がふつうのひらがなに変換）と説明がある。ここでは「家庭寮」という名称が使われている。



写真2 和知工場家庭寮内部

出典：『創業三十周年記念 郡是和知工場小史』、村島渚編集、郡是製絲株式会社和知工場、口絵pp.5、1940

キリスト教色の強い同社の社員教育は、軍国主義の高まりとともに変革することを余儀なくされた。朝礼で賛美歌を歌うことを禁じた工場もある。しかし、裁縫・調理・修身などの科目や茶道や生花などの工場教育は比較的続けやすく、家庭寮教育を実施する工場もあった<sup>24</sup>。

このことから、同社では、家庭寮は、戦時体制に入っていく中で始まった青年学校の教育の一環として組み込まれ、設置されたものとみられる。

### 6-2. 戦後の各工場の家庭寮

戦後の教育体制については同社の社史<sup>25</sup>に詳細があり、その概略を以下に示す。

昭和22（1947）年に労働基準法が公布されると、戦後は会社の管理を離れて寮生の結成する自治会に寮の運営が移管された。そこで自治管理が行われても郡是教育が守られるように、自治会、労働組合、会社の三者による寮舎厚生委員会が組織された。23（1948）年に各種学校令により郡是女学院を本社及び各工場構内に設置して従業員教育を行うことになった。青年学校廃止に伴う措置である。この女学院は本科（社会・国語・被服・生活・音楽・体育）4年、研究科（社会・和裁・洋裁等）1年以上として授業は1週15時間、通年45週で行われ、家庭寮教育は研究科で実施された。

31（1951）年には本科が2年、研究科が専攻科と改められ前後期各2年となった。39（1964）年には和裁・洋裁・割烹の技能教育及び家庭寮教育を含む家庭科が中心となった。

ここでは各工場に設置された家庭寮の平面図・立面図・外観写真から建物の特徴を把握する。

#### 6-2-1. 本工場家庭寮

同社本社・本工場は京都府綾部市にあり、同社工場の中でも大規模な敷地面積をもつ。家庭



寮は構内に2棟建っており、うち1棟は、構内北側の本工場の女子寮舎群と貯水池の間にあったが、現存していない。もう1棟は構内南側の道光館（元波多野社長社宅）の横に現存するが、こちらはおそらく食事研究所を転用したものである<sup>26</sup>。

図5は構内北側にあった家庭寮の平面図である。同社施設課により昭和28年11月に設計されている。木造平屋建の和風住宅（図6）で、板塀で囲われており、構内にありながら郊外住宅のような落ち着きが感じられる。

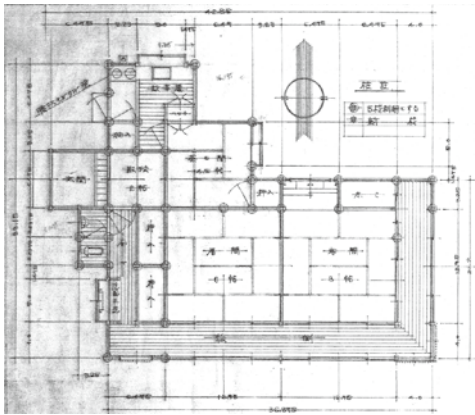


図5 本工場家庭寮平面図 1:250  
(原図は1:100)

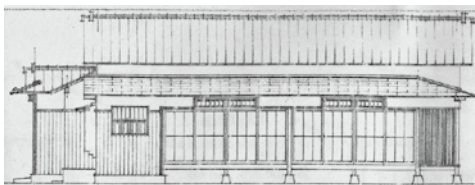


図6 本工場家庭寮 1:250 (原図は1:100)



図7 本工場家庭寮座敷展開図 1:250  
(原図は1:100)

ゲンゼエンジニアリング株式会社提供資料

内部は、南側に客間（8畳）と居間（8畳）が続き間として配され、客間は各1間の床（平書院付き）と違い棚をもち、長押の付いた本格的な書院造である（図7）。北側には茶の間（4畳半）と炊事場があり、玄関は1坪で、2畳の取次をもつ。この取次を介して廊下や縁側が配されるため、直接各部屋に行ける点は近代的である。全体的には内外部とも純和風で、日常生活より接客空間を重視した間取りである。また、設計図によると建物の柱の大部分は古材を利用したものであるが、本格的な格式の高い和風住宅として設計されている。規模や間取りは、同社社宅の乙号にも類似するものが見受けられるので、農家ではなく専用住宅を想定して設計されている。

#### 6-2-2. 八鹿工場家庭寮

八鹿工場の家庭寮は、正門近くの事務所棟の隣に建てられ、現存している。設計図によると、当寮は昭和26年に四方秀次郎（同社施設課の社員と思われる）が豊橋工場のために設計したもので、昭和32年頃に移築されている。



写真3 八鹿工場家庭寮外観（筆者撮影）

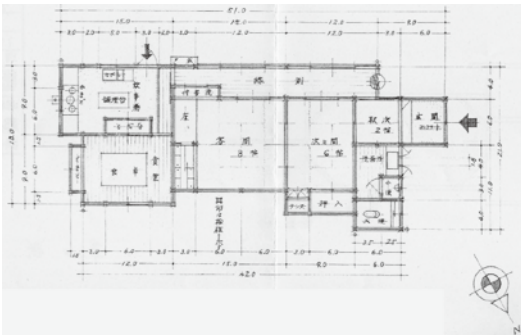


図8 八鹿工場家庭寮平面図 1:300  
(原図は1:100)

グンゼエンジニアリング株式会社提供資料



写真4 養父工場家庭寮外観 (筆者撮影)

建物は木造平屋建ての棧瓦葺き(写真3)で、内部は次の間(6畳)、客間(8畳)が続き間になっており(図8)、客間には各1間の床(付書院付き)と違い棚があり、長押が廻っている。この客間の設計図には茶事用の炉を設置する参考図が付属している。お茶のお稽古や礼儀作法を学ぶために付設しようとしたのであろう。玄関も取次があり、接客重視である。しかし、格式の高い表側2室に対して裏手の2室は全く性格が異なる。裏手には炊事場と食堂が配されるが、家庭寮で暮らす工女だけではなく、外部生の実習にも備えた規模となっている。全体としては、これも農家ではなく、社宅のような専用住宅を想定して建てられている。

### 6-2-3. 養父工場家庭寮

養父工場の家庭寮は、南北に細長い工場構内の北側に建つ。昭和41年の建設であるが、現在は休止工場となり、使用されていない。

この建物も木造平屋建ての棧瓦葺き(写真4)で、内部の次の間(6畳)、客間(8畳)が続き間になっている(図9)。前述の家庭寮に比べて建設年が新しいため、取次はホールに、書院は出窓に替わっている。また割烹教室が広く取られ、家庭寮での起居を通しての学びから、家

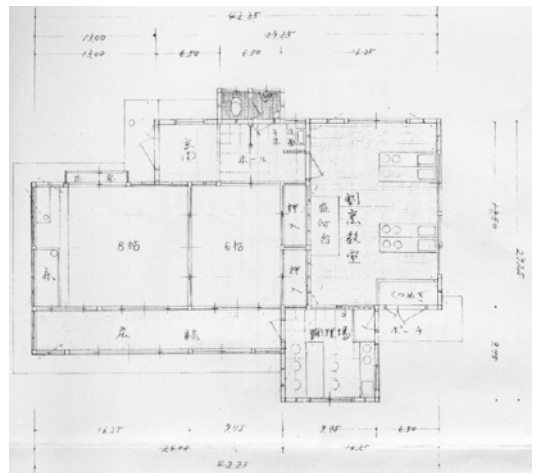


図9 養父工場家庭寮平面図 1:250  
(原図は1:100)

グンゼエンジニアリング株式会社提供資料

庭科の調理実習に重きを置いて計画されている。

以上、同社の家庭寮の変遷をみてきたが、聞き取りによると、昭和50年代くらいまでは、家庭寮で実習が行われていたようである。あるときは、お父さん(夫)役、お母さん(妻)役として模擬家族と訪問客の役等が予め決められた。客が訪問してきて家族と食事を共にして帰っていくという想定で進められ、実際に夫役には男子社員があてられた。家事・接客・作法な

ど一連の作業を実際に体得する場が家庭寮であった。

## 7. ま と め

繊維工場では、家庭寮成立以前には、キリスト教博愛主義の経営者によって試みられた分散式寄宿舎の中に、すでに別舎主義的寄宿舎の萌芽があった。大正4年に帝國製麻大阪工場では女子従業員の結婚退職後を想定し、宿泊しながら家事を学ぶという「家庭寮」と同じ目的をもった教育が行われた。その後、東洋紡績姫路工場にもこの形式が採用された。官制の団体による家庭寮事業よりも早く開始されたことが注目される。その後は戦時体制に入らる中で青年学校の教育の中に家庭寮が組み込まれていった。

繊維工場に設置された家庭寮とその教育は、高等女学校等の一般の家庭科教育における家庭寮の成立から展開までと比較して、時期的にも質的にも劣るものではなかったといえよう。繊維工場の家庭寮は、法律や社会情勢に影響を受けながら、学校教育と同様に展開していった。

また、建築構成が判明する資料が少なく、仮定ではあるが、繊維工場の家庭寮は建築構成にバリエーションがみられることが一般の女学校教育での家庭寮との違いであることを指摘したい。教育指導機関からの影響をあまり受けずに、工場独自の考え方で家庭寮が成立したこともその背景にはある。繊維産業では、豊かな資金力を元に、民芸運動と連動した家庭寮や本格的な書院造の家庭寮を模索しながら建設することが可能であった。

### 注

- 1) 野田満智子、家庭科教育史における家庭寮教育の系譜（第3報）—家庭寮教育の成立とその実態—、日本家庭科教育学会誌 第26巻 第3号、1983
- 2) 前掲1)
- 3) 野田満智子、家庭科教育史における家庭寮教育の系譜（第1報）—明治期啓蒙的女子教育における別舎主義寄宿舎論と家庭寮教育の萌芽—、日本家庭科教育学会誌 第26巻 第2号、1983
- 4) 野田満智子、家庭科教育史における家庭寮教育の系譜（第2報）—女学校寄宿舎への擬制家族制度の導入と家庭寮教育理念の形成—、日本家庭科教育学会誌 第26巻 第2号、1983
- 5) 前掲1)
- 6) 伊藤めぐみ・志村聡子、大日本連合婦人会による家庭寮事業の展開 一機関誌『家庭』の記事を中心に、総合女性史研究 第23巻、pp.17-26、2006. 3
- 7) 関川千尋・菊沢康子、わが国における“家政実習館教育”の系譜とその現代的意義、家政学研究 第22巻 第2号、pp.136-146、1976
- 8) 倉敷紡績株式会社『倉敷紡績百年史』1988、社宅研究会編『社宅街 企業が育んだ住宅地』学芸出版社、pp.157-166、2009、『月刊 民藝』第24号、日本民藝協会、pp.37-44、1941. 3など
- 9) 社宅研究会編『社宅街 企業が育んだ住宅地』学芸出版社、pp.158の8—pp.160の6行目、2009
- 10) 前掲9) pp.162の3-4行目
- 11) 宇野利右衛門『帝國製麻大阪製品工場』工業教育會出版部、1922
- 12) 前掲11) pp.58の8行目「昨年十月に開始せられた」とあり、記述した日は大正5年3月である。
- 13) 前掲11) pp.55の6-7行目「元は病院の一部に用ゐられて居た建物が、不用に属したのを、此所に移して改築し、さうして此の設備に當てた」と記載がある。
- 14) 宇野利右衛門『汗愛の靈火に輝く模範工場東洋紡績姫路工場』工業教育會出版部、1927、復刻版『日本労働管理士資料集 宇野利右衛門著作選 第2期9巻 模範工場集』五山堂書店、1989
- 15) 『修養園』は、明治39（1906）年、青山師範学校の学生、連沼門三により創立された、神道色の濃い国粹主義の組織である。
- 16) 前掲14) によると、同社は、「訓育」の系統を、従業員の居住形態別に男子寄宿舎、女子寄宿舎、社宅と準社宅、通勤者その他の4つに分けている。そのうち女子寄宿舎の系統は、20棟の寄宿舎の他、外に面会室、大広間、自修寮、その他の付属設備がある。2,100余名の寮生を収容し、係員4名、世話係13名にて指導。各室に室長、各寮に寮長を置き、教育的施設の徹底普及を図っている。
- 17) 前掲14) pp.146の5-8行目
- 18) 前掲14) pp.3の最後の行
- 19) 『沿革史』大日本連合婦人会、1943
- 20) 前掲6)
- 21) 『系統婦人会の指導と経営』大日本連合婦人会、pp.96の2-6行目、1935
- 22) 藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡『民芸運動と建築』、淡交社、pp.147、2010
- 23) 前掲22)
- 24) 『ゲンゼ100年史』ゲンゼ株式会社、pp.262の16-17行目、1998
- 25) 社員教育については、『郡是製絲株式會社六十年史』郡是製絲株式會社、1960、『ゲンゼ株式會社八十年史』ゲンゼ株式會社、1978、『ゲンゼ100年史』ゲンゼ株式會社、1998に記載されている。
- 26) 戦前の本社本工場の工場平面図には、現在の家庭寮の位置に「食事研究所」と記載された建物が記されている。この建物の平面図は現存していない。